京都だより

Kyoto Dayori

文・写真／坂木壽里　池井　健
監修／魚谷繁礼

【特 集】京のアソビ

2015年 6月号　第1回「ほこら・お地蔵さん」
2015年 8月号　第2回「鳥居」
2015年10月号　第3回「梵鐘」
2015年12月号　第4回「提灯」
2016年 2月号　第5回「墓」
2016年 4月号　第6回「自然」

KYOTO SOCIETY OF ARCHITECTS & BUILDING ENGINEERS
一般社団法人 京都府建築士会
https://www.kyotofu-kenchikushikai.jp

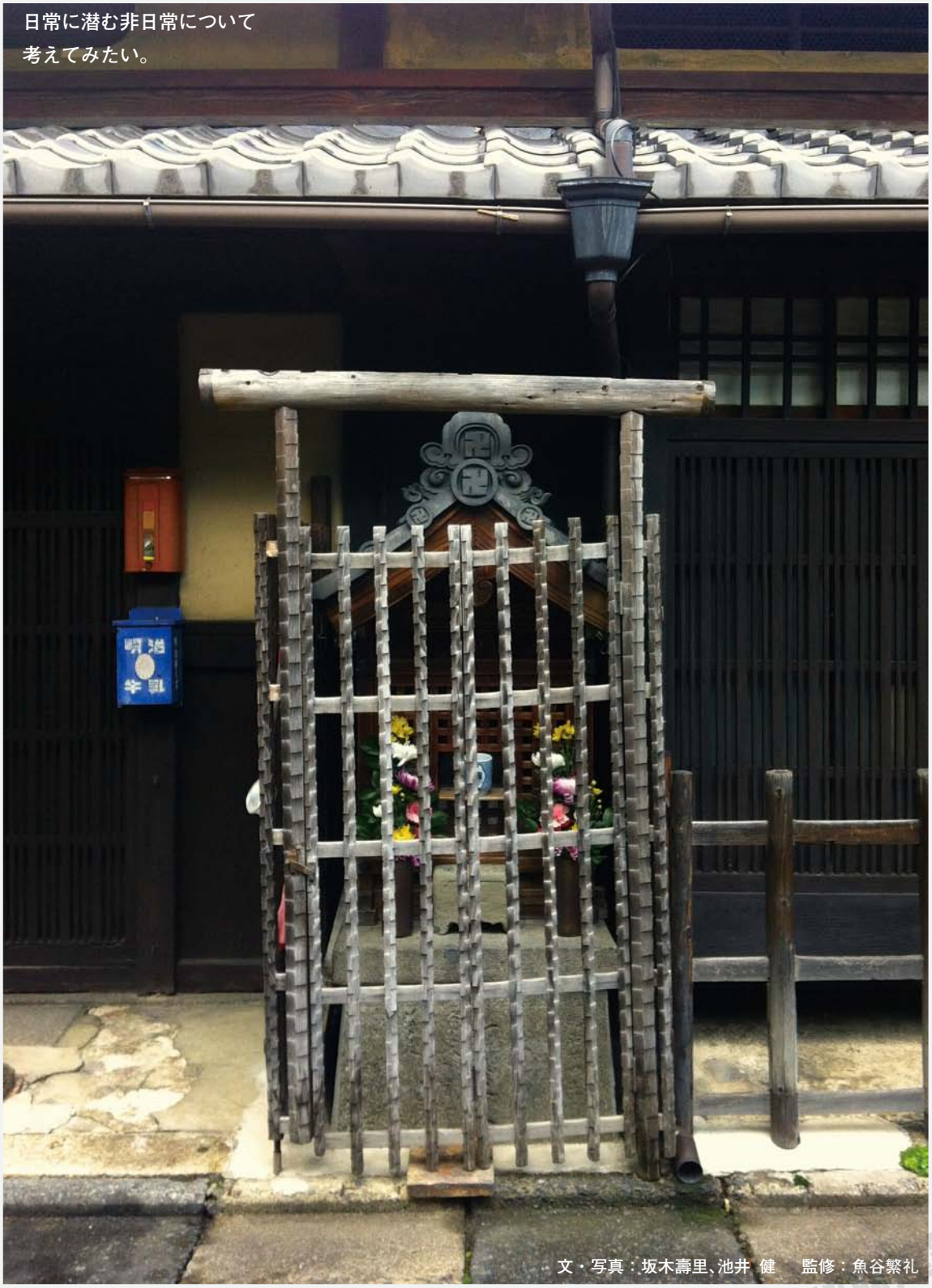
（一社）京都府建築士会

京のアソビ

1

ほこら・お地蔵さん

日常でよく見かけるけれど、
日常的ではない空間やモノ。
そんな空間やモノを取り上げて、
日常に潜む非日常について
考えてみたい。



文・写真：坂木壽里、池井 健　監修：魚谷繁礼

（一社）京都府建築士会

お地蔵さんとは。

一口にお地蔵さんといっても、様々な種類があります。京都では「延命地蔵」、「子安地蔵」、「とげ抜き地蔵」、「大日如来」などをよく見かけます。お地蔵さんとはいったい何なのでしょうか。

お地蔵さんは民衆の道祖神信仰が仏教の地蔵菩薩信仰と習合した後、平安時代に白河天皇が地蔵菩薩を手厚く加護するなどしたことをきっかけにひろく民衆に広まっていったようです。京都では動乱や天変地異といったまるで地獄のような出来事がたびたびおこりましたが、そういった現実世界における地獄から救済してくれるということも京都でお地蔵さんへの信仰が広まった理由の一つといえます。

またお地蔵さんは、神様や仏様と違い、まだ修行中の身で悟りをひらいていないようで、私たちにとって身近な存在と言えるかもしれません。昔の人にとってお地蔵さんという存在は、自分たちの近くで見守ってくれていて、自分たちと同じ目線で願いを聞いてくれたり、身代わりになってくれたりするなど、とても親しみ深い存在だったようです。

日常に潜むほこら。

京都市内を歩いているとよく見かけるほこら。路地にひっそりあったり、近代的な建物に入り込んでいたりと様々なかたちで出会います。このようにそこら中にあるのにもかかわらず、つい見落としがちなほこら。そしてそれらほこらの中にお地蔵さんがいます。

京都の街は、ほこらがあることによって、京都らしい古都の雰囲気を一層感じる事ができ、なおかつ昔からの日常の時間を思える気がします。何気ない路地の奥にほこらがあるだけで、ただ長屋が並んでいる場所というだけではなくて、お地蔵さんがそこでずっと見続けてきた京都の昔からの時間や生活を感じる事ができるように思います。そして近代的な建物にほこらがあると、どこの都市でも見かけるようなよくある建物が、京都だけの特別な雰囲気をもった建物に見えてきます。

ほこらがあることで街がより奥行きがあるものに感じます。何か特別なものではなくて、昔から見慣れたほこらだからこそ、ずっと変わらないものを自然に感じることができるのかもしれません。そして日常の中にふいに非日常が現れるのかもしれません。

(一社) 京都府建築士会

祈り願う場所としてのほこら。

京都の街のあちこちにたくさんのほこらがあり、お年寄りから小さな子供まで、あまり形式などにとらわれず、自由にいつでもすぐに祈ることができます。

神社やお寺はそれそのものが特別な場所に設えられた非日常な空間で、神様や仏様を拝むためには私たちは自らそうした非日常の場所に出向かなければなりません。そして、神様や仏様は人間とは住む世界が違い、ほど遠い能力を持っていたり悟りを開いたりしているので、決して身近な存在とはいえません。

それに対してほこらは、私たちが日常的に生活している街の中に紛れ込んでいて、お地蔵さんを拝むためにわざわざ非日常の空間に出向く必要はありません。またお地蔵さんはまだ悟りを開いていないためか身近な存在といえそうです。普段の生活をおくる街のなかにほこらがあって、お地蔵さんがいるというのは、日常と非日常が同じ空間に同居しているように感じます。

明治4年に地蔵撤去の布令、同5年に地蔵盆の禁止令が出されるなど、お地蔵さんは明治時代には廃仏毀釈による受難の時代を迎えます。しかしその後、川の底や井戸の中底などいろんなところから隠されていたお地蔵さんが発見され、再び人々の生活に寄り添うようになっていきます。個人を重んじる風潮が目立ってきた1970年代には、地蔵盆はコミュニティー形成の重要な役割を担うようになっていったようです。仕事や生活スタイルが多様化している現代では、町内の人々など他人と関わる機会はあまり多くありません。地蔵盆は、ただの季節的な伝統的な行事というだけではなく、地域に住むお年寄りから小さな子供までが一同に出会える現代においては貴重な機会を与えてくれます。そのような機会に自然と町内にはどんな子供がいてどういう人が住んでいるのかということを知ることができ、そのことは例えば防犯の役割をも果たしそうです。

最近では車が通れないという理由でほこらの屋根の一部を切除したり、建物の建て替えにより行き場を失ったりしたほこらが発生したり、町内での維持が大変になったお地蔵さんをお寺に預けるといった事例も増えてきたそうです。一方、景気が良いときにはたくさんのほこらが新調されたり修復されたりしたそうです。

ほこらやお地蔵さんはずっと私たちの生活と隣り合わせで、時代や人々のこころを反映してきたといえるのではないでしょうか。歩いていても見落としてしまいそうなくらい地味ですが、実はずっとかたちを変えつつも私たちの生活に寄り添ってきたほこらとお地蔵さん。

ほこらとお地蔵さんは、時間の流れを感じることができるタイムマシンのようでもあり、京都の都市空間をより一層豊かにするさりげない装置でもあり、実用的な役割も担い、そして時代を反映するバロメーターでもありそうです。ほこらが日常から無くなっても困らないかもしれません。ですがほこらがあることで、私たちの日常は少し豊かになり、その豊かさは私たちにとって重要な豊かさだと感じます。

現代の私たちとほこら・お地蔵さんとのカンケイ。

さかき・じゅり
1989年生まれ　ラジオ局で番組の企画、編成に携わる傍ら、現代における伝統産業のあり方の再発見に取り組む

いけい・たけし
1978年生まれ　建築設計事務所、写真事務所を主宰する傍ら、大学等で非常勤講師を務める

●参考文献／竹内 泰、1994、聖祠の配置に関する研究～京都の都市空間と地蔵～、京都大学大学院

(一社)京都建築士会

ところで、ほこらはどこでだれがどのように作っているのでしょうか？
職人さんにお話を伺いたいと思います。

神具店では元々どのようなものをつくられていたのですか？

元々神具店では、神社や企業、家庭でお使いになるもの、皇室関係でお使いになるものを主に製作していました。

昔から神具、仏具の両方を製作されていたのですか？

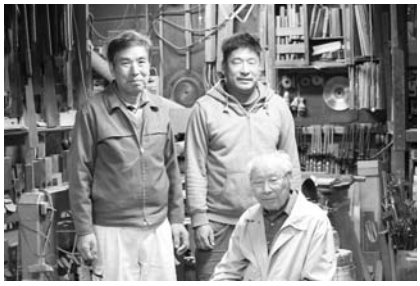
神道、仏教関係なくどちらのものも作っていました。お寺でもお稲荷さんを祀ったりしているように、昔は神様も仏様も一緒でした。地方に行けば仏具屋さんが神様の道具もつくられます。神具と仏具とに分かれているのは京都だけだと思います。私のところでも仏具屋さんに神棚を納めることもあります。

ほこらやお社の扉の中身はどのようになっているのですか？

神座です。浜床の上に厚畳を敷き、その上に帳台を安置する八重畳、龍鬚、茵、御霊代を奉安し、おおいで覆っています。

ほこらをひとつつくるのにどれくらいかかりますか？

ものによりますが、大体一ヶ月から三ヶ月ほどかかります。



年間どれくらいのほこらの仕事の依頼がありますか？

3、4つ程依頼があります。多いときは5つ程あります。大体地蔵盆にむけて新しくつくったり、修復したりします。

全て神具店でつくられているのですか？

全てではありません。昔から彫刻、銅板、檜皮などはそれぞれの専門の職人さんに頼むようにしています。

京都ならではのほこらの形や様式はありますか？また、お地蔵さんによってほこらのデザインが変わったりはしますか？

京都ならではというわけではないですが、今は（むくりのついた）丸い感じの屋根の方がお地蔵さんが入るのにやわらかい感じがするということで人気があります。

デザインは好みや予算によりますが、製作する神具店に関係なく大体同じようなものが多いです。お地蔵さんによってほこらにつける紋が違います。

現在の町内の方にとって、ほこらやお地蔵さんとはどのようなものなのでしょうか？

お地蔵さんは子供の守り神なので、町内で大切に守っています。町内に2つあるお地蔵さんを男の子と女の子とに分けることもあります。最近では建物の建て替えなどによりほこらの設置場所がなくなってしまい、地蔵盆の時期までお地蔵さんをお寺に預けている町内もあります。壬生寺では地蔵盆のときだけお地蔵さんを貸し出したりもしています。世の中の状況が変わり、ほこらが道路の一角にあることで車の出し入れがしにくいという理由で、屋根の一部を切って小さくして欲しいと言われることもありますが、他の職人さんが製作されたほこらを切ることはしのびないのでお断りしています。ほこらの設置場所がなくなってしまい、交代で町内の人の家の中に保管されるお地蔵さんもいますが、子供の守り神なので守っていこうと思ってくれると嬉しいです。

㈲牧神祭具店

大正７年頃創業。牧武夫さんの息子さんで3代目になる。各神社の遷宮にも携わるなど幅広く活躍されている。

〒602-8061
京都府京都市上京区油小路通
上長者町上ル甲斐守町121
TEL 075-441-7533
FAX 075-451-5043

(一社)京都府建築士会

京のアソビ

2
鳥居

日常でよく見かけるけれど、
日常的ではない空間やモノ。
そんな空間やモノを取り上げて、
日常に潜む非日常について
考えてみたい。

文・写真：坂木壽里、池井 健　監修：魚谷繁礼

（一社）京都府建築士会

鳥居の起源と意味

鳥居の起源については諸説あり、明らかにはなっていません。

例えば、インド仏教にみられるトラナといわれる門や、中国の華表や鳥竿という標柱、雲南省とミャンマーとの国境地帯に住むアカ族が悪人や悪霊の出入りを防ぐ役割として村の入り口に建てた鳥の木彫りを冠した門（ロッコン）など海外にその起源を求める説があります。あるいは、日本神話に登場する天照大神が岩屋にこもられた際、その岩戸の前に木を立ててニワトリを鳴かせたことを起源とする説もあります。

語源についても、「通り居る門」から鳥居と呼ばれるようになったとする説や、元々建築用語として存在していた「トリイ」という言葉（奈良時代には高欄の横木の最上部のものが鳥居桁と呼ばれていた）が平安時代初期には神社の門を指すようになったとする説など、諸説あります。

現在の日本では一般的に、鳥居は人間界と神域をわける境界の門、目印、結界などとしての意味があると捉えられています。

またその他にも、路上での放尿や不法投棄防止の目的で壁面に鳥居の絵を描いたりする例がみられ、そうした目的で使用する場合は、本来の鳥居をそのままのかたちで使うのは恐れ多いという理由で下の横架材を上の横架材よりも長くすることが多いようです。

神明鳥居（神明神社）

明神鳥居（平安神宮）

途中で切れた鳥居（伏見稲荷大社）

八角の鳥居（大酒神社）

金色の鳥居（御金神社）

様々な鳥居

鳥居には、大きく分けてふたつの形式があります。

ひとつは照りや反りが特徴の明神鳥居で、もうひとつは照りや反りが施されていない神明鳥居です。また、神社や信仰するものの違いによって、色やかたち、細部のつくりなどにはさらに多くのバリエーションがあります。

明神鳥居の例としては、高さ24メートル　幅18メートルもある平安神宮の大鳥居や、伏見稲荷大社の稲荷鳥居などが挙げられます。

一方、伊勢鳥居とも呼ばれる神明鳥居の例としては、全国の八幡社でみられる八幡鳥居や京都は太秦にある木嶋神社の三柱鳥居などが挙げられます。

その他にも、御金神社の金色の鳥居、大酒神社の八角の鳥居、伏見稲荷にある途中で切れていてくぐれない鳥居など、一口に鳥居といってもさまざまな個性があります。

（一社）京都府建築士会

朱と照り

このように、よく見かける鳥居や変わったかたちをした鳥居、小さな鳥居や巨大な鳥居など、京都にはいろいろな鳥居がありますが、共通して言えることは、皆それぞれが独特の存在感を持っているということです。

特に明神鳥居は、日常ではなかなか見かけることのない朱色をしており、その照りを維持する為に塗り替えられたり建替えられたりするそうです。

こうして与えられる質感は、どちらかというと時間の経過によって良い雰囲気が出てくるというものではないように感じます。しかし、そのことが逆に日常の時間の流れから切り離された、何かしら特別なものという印象を与えているのではないでしょうか。

その他にも、私たちが日常生活で見かける多くのものと異なり、鳥居のかたちは物理的な使い勝手で決められているのではなく、その大きさも様々です。

このように鳥居の色や照り、かたちや大きさなどは私たちの日常生活から切り離されたところで成立しているものであり、そのことが鳥居に独特の存在感を与えているのかもしれません。

街中の鳥居

京都の街では神社以外にも、街の一角にある鳥居、塀や外壁の足元にある鳥居、百貨店の屋上にある鳥居など様々なところで鳥居を見かけますが、その先に何か神聖なものが実在するわけではないということもよくあります。何気ない街並みの中にあってこうした存在感を持つ鳥居は、ある種の違和感といっても良い雰囲気をつくり出していると感じます。この違和感が本来の鳥居のもつ意味と重なり、鳥居の向こうに心理的に神聖な何かを生み出すのかもしれません。

例えば一見何の変哲もない石であったとしても、その前に鳥居を建てる事によってそれが神聖なものなのだということを感じることができます。わたしは子供のころから鳥居を見るとわくわくします。それは鳥居の奥に不思議な空間を感じ、現実の世界とは異なる物語のようなものを想像するからだと思います。

現代の街には常に気の張った慌ただしい毎日を過ごしている人も多いと思います。仕事で忙しくあっという間に一日が終わったり、ありあまるほどの情報やモノばかりが蔓延する毎日にアタマもココロもいっぱいになったりしがちです。そんな日常生活を送る街の空間に鳥居が存在することによって、現実の世界では感じることのできない、物語の中に入っていけるような、不思議で神聖な空間を感じることができ、窮屈になったアタマとココロを少しだけ解放してくれるのかもしれません。

鳥居がつくりだす空間は、日常に寄り添うようにして存在する祠とは対照的に、街中に溢れている雑多なコトやモノから離れられる非日常としての余白をあたえ、ココロのなかで自由に想像し拡張できる空間として機能しているのかもしれません。そのように無駄と思われる空間こそが、生きる中でのゆとりとなり人々の生活を豊かにするのだと思います。

さかき・じゅり　1989年生まれ　ラジオ局で番組の企画、編成に携わる傍ら、現代における伝統産業のあり方の再発見に取り組む

いけい・たけし　1978年生まれ　建築設計事務所、写真事務所を主宰する傍ら、大学等で非常勤講師を務める

(一社)京都府建築士会

ところで、鳥居はどこでだれがどのように作っているのでしょうか？
伏見稲荷大社の千本鳥居をつくられている職人さんにお話を伺いました。

伏見稲荷大社の鳥居はいつから増えてきたのですか？

戦後に神社が奉納として鳥居を募りはじめてから増えてきたと先代から聞いております。個人や会社などが奉納しています。今の時代は少ないですが、昭和、やはりバブルの時期が特に多かったです。

あくまでも奉納ですが、広告として考える企業もいると思います。

祠に置かれているような小鳥居もつくられているのですか？

つくらせてもらっています。ただ、最近は景気の悪化や信仰心が薄れた為か、新しく小鳥居が奉納されることが減り、荒れたまま放置されている塚もでてきています。

昔から稲荷鳥居は朱色ですか？

はい。平安時代から今の色だと聞いています。ただ時代によって塗料や光沢感などに多少の違いはあります。

稲荷鳥居の製作工程を聞きました。

材料選び

基本的に伏見稲荷のご神木である杉の木を使用します。どこの山にどの木があるかを常に把握しており、大きな鳥居用の木の選定には自ら山に行き、土質、伐り旬、倒し方などをチェックします。また鳥居の柱は2本あるので、大きさに関係なく同じ条件の木材を選ぶようにしています。

材料の加工

木材を八角形に製材したうえで丸かんななどを使い丸くします。腐りにくくする為に足元を焼き、透明と朱色の2種類の防腐剤を塗ります。横架材や屋根など柱以外の部品も加工します。

文字入れ

自社の職人が彫刻刀を使って手彫りします。

塗装

昔は朱をニカワで溶いていましたが、今は油で溶いています。光沢のある綺麗な仕上にするために、油の配合を変えて5回塗ります。

組立

すべての部品を麓から担いで搬入し、穴を掘って水平、垂直を確認しながら土を戻す掘立で組み立てます。その際、名前や年月日の文字が山（神様）側に向くようにします。大きな鳥居は足下を饅頭型のセメントで固めます。

古くなった鳥居はどうされるのですか？

朽ちてきた鳥居は、奉納者に連絡して処分します。山の入り口近くの鳥居も奥の方の鳥居もすべて伏見稲荷大社内にある処分場に持っていきます。

処分場では鳥居だけではなく灯籠やお札なども含めて、神主さんがお払いをしてからお炊き上げします。

鳥居つくりの信念などがありましたらお聞かせください。

少しでも長持ちするように、鳥居を奉納する場所によって木材や加工を変えたりしています。精一杯心を込めて仕事をする、目に見えない所まで丁寧にやる、奉納した方に喜んでもらえるようにつくることを信念にしています。そして続けていくこと、継承することが大切だと思っています。

㈲長谷川工務店

伏見稲荷がご鎮座されて1300年あまり。その当時から宮大工として鳥居や神具関係の製作に携わっており、伏見稲荷大社からは長谷川權太夫という名前も賜っている。

〒602-8061
京都府京都市東山区本町
22丁目508
TEL 075-561-2013

（一社）京都府建築士会

京のアソビ

3

梵鐘（ぼんしょう）

日常でよく見かけるけれど、
日常的ではない空間やモノ。
そんな空間やモノを取り上げて、
日常に潜む非日常について
考えてみたい。

文・写真：坂木壽里、池井 健　監修：魚谷繁礼

（一社）京都府建築士会

身の回りの音　人工の音　梵鐘の音

お店のＢＧＭ、雨の音、車が走る音、料理をする音、お祭りのお囃子、パソコンのキーボードを打つ音など、身の回りにはたくさんの音が溢れています。自然がつくりだす音もあれば、人がつくりだす音もあります。

人工の音である音楽などは、今では聴きたいときにＣＤやインターネット、テレビやラジオやスマートホンなどでいつでも聴くことが出来ます。しかし音を再生する機械が発明されるまでは、音楽は演奏されている場所に自ら聴きに行かねばならず、他の多くの音についても音が生まれるその場所に居合わせなければ聴くことができない、身近というよりは貴重な存在だったのかもしれません。

そのような時代から各地に数多く存在してきた梵鐘は、その姿が「坐した仏の姿なり」といわれ、その音が「仏様の御声」といわれることからもわかるように、仏様の説法を多くの人々に届けるという役割を持っており、他に例をみないほど広範囲に渡って音を響かせてきた、数少ない身近な音を生む道具だったといえるでしょう。

日本製の梵鐘としては、京都は妙心寺にある６９８年に製造されたものが最古とされています。梵鐘の寿命は長く、高台寺の梵鐘は４００年ほど同じ音色で使用できたそうです。また、その音色は障害物がなければ１㎞ほど先まで届くといわれており、現代のように音楽再生プレイヤーやインターネットなどの通信機器がない時代において、時間的にも空間的にもこれほど多くの人々に共有されてきた人工の音は他にはなかったのではないでしょうか。

梵鐘の音が持つ効果

梵鐘の役割のひとつに、時を知らせるということがあります。

現代では時間を知りたいときは時計を見て確認をするようになりましたが、時計ばかりを見ていると時間に縛られて急かされるような気持ちになったり、１日が慌しく過ぎてしまうような感覚になったりしてしまいがちです。

梵鐘も、朝と夕方など決まった時間を知らせるために鳴らしますが、梵鐘の音はなぜか急かされるような気持ちにはなりません。朝を知らせる鐘の音では、朝の澄んだ空や、いきいきとした鳥の鳴き声に気付くことができたり、夕方を知らせる鐘の音なら動と静の狭間、赤と青の混ざった夕焼けをふと見ることができたり、普段見落としがちな身の回りの何気ないものの美しさを感じることができるように思います。

普段なにも考えずに過ごしている日常の中で、空間に響き渡る鐘の余韻が聞こえてくる間はこの世とあの世が繋がっているようにも思えるし、すぅーっと日常に溶けて消えていく鐘の音が、時間は永遠ではなく、不変だと感じてしまう日常が実は非日常と隣り合わせであることを知らせてくれているようにも感じます。ともあれ、鐘の音に気付いたときは既にそれは余韻であり、鐘の音は、音そのものよりも音の余韻のその後の日常のためのもののように感じます。そういう意味では、教会で鳴らされる鐘やモスクから流れるコーランが音そのものに焦点があてられているように感じるのと対照的です。そしてお寺の鐘は何か答えあることがらを問うているのではなく、自分自身が何か想うきっかけを自然とそっと与えてくれているように感じます。

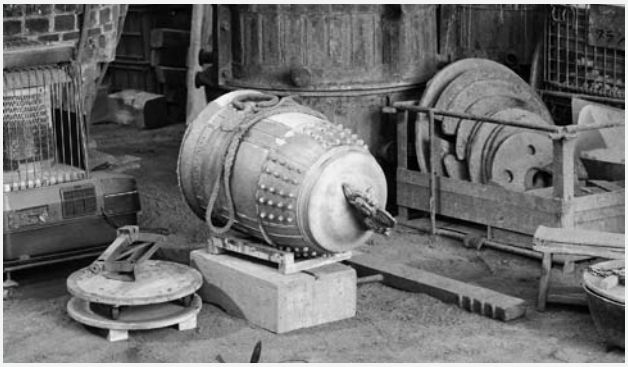
（一社）京都府建築士会

こうしたことは、梵鐘の音の性質にも関係しているようです。梵鐘の音の大切な特徴のひとつとして余韻があげられますが、その余韻が2分ほど続く梵鐘もあるそうです。そしてその余韻の中には1／fゆらぎという小川のせせらぎにもみられるリラックス効果のある周波数が含まれているそうです。

日々暮らしていて、鐘の音に気付くときもあるし気付かないときもあります。ただ鐘は毎日同じ時間に鳴らされています。ここちよい音の余韻を広く遠くまで響かせるということが梵鐘に課せられた最重要の課題であり、梵鐘が存在する意味だったのかもしれません。

共有される梵鐘の音

これまで述べてきたように、梵鐘を鳴らすと一度に多くの人々へ同じ音を届けることができます。一時に広範囲に渡って音がひとつの空間をつくりだすということもできるでしょう。そしてその音は遠い昔から変わらない音色です。多くの人々にとって心地よく、心にそっと入ってきます。音の意味を問われたり、難しい理屈を求められたりするようなことはなく、無限に広がることができるこころの余白部分を刺激してくれるように思います。



現代においては高性能なスピーカーや拡声器はたくさんありますが、梵鐘のように非常に広範囲に渡って音を届けると同時に近くで聞いても心地よい音をつくるというのは難しいようです。

現代の音響機器からは感じとることが難しい音の揺らぎをもっていたり、大勢の人々と心地よい生の音を時間的にも空間的にも共有できたりすることは梵鐘の大きな特徴のひとつです。

音を受け継ぐ 普遍的な存在

これまでに取り上げてきた祠と鳥居は、日常の中に非日常をつくり出すモノとして昔から現代まで受け継がれてきました。それらモノとして受け継がれてきたものにはかたちや材料などにいくつものバリエーションがありますが、梵鐘にはそうしたバリエーションはあまり見受けられません。

これは、梵鐘が見た目やかたちを重要視して受け継がれてきたというより、音のここちよさや音のつくりだす空間、つまり音の生み出す現象そのものが大切に受け継がれてきたからではないでしょうか。

祠や鳥居と異なり、梵鐘のつくり出す非日常空間は、こちらからのアクセスの有無に関わらずある範囲においてある一定の時間つくり出されるものであり、それをつくり出しているのは音そのものだといえるでしょう。

梵鐘は土の型から作られます。梵鐘が出来上がると土を再利用するために、型を壊してしまうそうです。どれほど素晴らしい梵鐘が出来上がったとしても、同じ梵鐘は二度とつくることができないのです。

そこで重要なのが職人さんたちの耳であり、心地よいと感じる音を伝え続けることになるのです。

文化や生活の仕方が変わっても心地よいと感じる音は大きく変わらず、従って古く昔から梵鐘の伝える音もずっと変わらないままです。

絵画や彫刻だけでなく、人々の感覚に訴えかける人工物は実に多くあり、求められるものも時代や社会によって様々ですが、梵鐘は非常にシンプルでありながらいつの時代もどんな人にも響く音を生み出してきました。そういう意味で梵鐘の音がつくり出す空間は、人々にとって普遍的な存在であるといえそうです。

さかき・じゅり
1989年生まれ　ラジオ局で番組の企画、編成に携わる傍ら、現代における伝統産業のあり方の再発見に取り組む

いけい・たけし
1978年生まれ　建築設計事務所、写真事務所を主宰する傍ら、大学等で非常勤講師を務める

(一社)京都府建築士会

ところで、鐘はどこでだれがどのように作っているのでしょうか?
職人さんにお話を伺いたいと思います。

鐘の音色は何で決まりますか?

銅とスズの配合の加減と、肉厚で変わります。肉厚は厚いと低くて、薄いと高い音になります。

鐘の見た目は何で決まりますか?

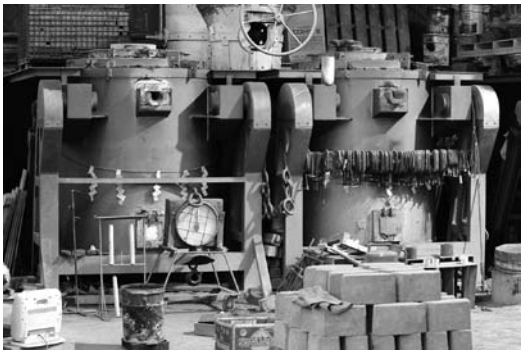
見た目は鋳型の形、成型の具合、銅と錫を溶かす温度できまります。大体1100度くらいの温度でつくります。温度が低いと型の模様などが綺麗にでないです。

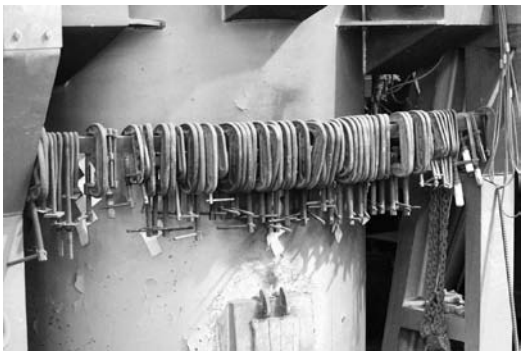
模様はどのように決まるのですか?

木型や、へら押し作業によって決まります。木型を使って土の型をつくり、そこに銅と錫を流してつくります。

木型職人さんがいらっしゃるのですか?

木型職人さんや、仏像なら仏師さんにたのみます。それに昔から受け継いでいる色々な種類の木型があります。依頼主の要望をうけて特注で新しくつくったりもします。





型でつかわれた土は、鐘ができた後どうなるのですか?

再利用します。何十年、何百年と、元の土にもどして再利用しています。ですので、同じ鐘は二度とできないです。

つくるときは音色と見た目どちらを重視されていますか?

音色です。長年働いていると、些細な音の違いがどんどんわかってきます。

注文されるときに音色や音の大きさを指定されますか?

全くおなじ音や見た目の梵鐘をおつくりするのは難しいのですが、こちらに置いている梵鐘を見て頂いて、ご要望に応じながらおつくりします。

鐘の音色で仏教的な意味合いなどが変わったりしますか?

それはあまり関係ないです。ただ山の上か平地かによって音の大きさが違ったり、禅宗は高い音が好まれる傾向があったりします。まちまちなのですべてにあてはまるわけではないですが。

鐘の音はどれくらいの範囲で響き渡りますか?

建物がない状態なら1～2キロほど響き渡ります。今はもうご覧のとおり住宅街なので、数百メートルも届かないこともあります。

余韻の長さや音の高低など、梵鐘のベストな音はありますか?

鐘を撞いた初めの打撃音をアタリ、それに続く高音をオシ、最後まで続く余韻をオクリといいます。このアタリ・オシ・オクリの三拍子が揃った音がいいです。「じゃん」っていう割れた音はだめです。「ウォーン」とか「ゴーン」っていう余韻のある音がいいです。余韻は長ければ長いほうがいいです。鐘の音はお釈迦様が説法される声、獅子吼の説法とか言いますので、余韻があるような幅広く世間に響き渡る梵鐘の音色のほうがいいです。

岩澤の梵鐘㈱

昭和19年創業。現社長岩澤比呂始で二代目となる。国内、国外含めこれまでに約5千口の梵鐘を納めてきている。

〒616-8134
京都市右京区太秦唐渡町22
TEL 075-871-1001
FAX 075-872-8186

(一社) 京都建築士会

京のアソビ

4

提灯

日常でよく見かけるけれど、
日常的ではない空間やモノ。
そんな空間やモノを取り上げて、
日常に潜む非日常について
考えてみたい。

文・写真：坂木壽里、池井 健　監修：魚谷繁礼

（一社）京都府建築士会

提灯の歴史・日用品としての提灯

提灯は元々中国から仏具のひとつとして渡来したものだといわれており、当初は竹かごに和紙を張っただけで折り畳みのできない簡単なものだったそうです。提灯について書かれている最も古い文献は１０８５年の『朝野群載』だといわれており、同じく最も古い絵画資料は１５３６年の『日蓮聖人註画讃（巻第五）』のようで、こちらには既に折り畳みができ、かご状でない提灯が描かれています。その後の安土桃山時代から江戸時代初め頃、祭礼や戦場で大量に使用されるようになるとともに、軽くて携帯に便利な提灯が主流になっていきます。しかし、その頃までは提灯はまだ上流階級の人々だけが使用するにとどまり庶民の間には広まっておりませんでした。

江戸時代中期頃にろうそくが大量生産できるようになると、それにあわせて提灯も家の灯りや携帯用の灯りなど様々なかたちで庶民の生活に浸透していくことになります。お盆の供養に提灯を使う風習もこの頃浸透していったそうです。この頃の提灯は、現代での門灯や懐中電灯のような存在であり、提灯屋さんはいうなれば街の電気屋さんのように日常生活に不可欠な存在だったのかもしれません。

現代の提灯

電気による照明が一般的となった現代においては、いうまでもなく昔のように日用品として提灯を使用することはほとんどありません。しかし、気をつけて見てみると京都の街では実に多くの提灯を見かけます。良いものが数多くあります。

南座の入り口の前には「南座」と書かれた赤い大きな提灯が下げられており、祇園の街では茶店だった頃を偲ばせる八つの串団子が描かれた赤い提灯が、先斗町では昔の鴨川にたくさんいたとされる千鳥の模様が描かれた提灯がそれぞれ軒下に下げられています。他にも、数ある飲み屋の前などに赤や白の様々な提灯が下げられています。

これらの提灯は街の区別を示したり、建物の用途を示したりというサインとしても機能しています。電気がない時代には現代のネオンサインのように照明と看板を兼ねるものとして実用されていたのかもしれません。

しかし、サインとしての役割だけならば現代においてはもっと安価で効率もよく耐久性の高いものが数多くあります。

そんな中でこうした街中の提灯は、劇場の入口を灯すことで非日常の空間への高揚感を高めたり、柔らかい光を夜の繁華街に灯すことで街に妖艶さを与えたり、居酒屋の入口をそっと灯すことで暖簾の向こうの賑やかで楽しい空間を想起させたりなど、単なるサインにとどまらない役割を果たしているように思えます。

（一社）京都建築士会

提灯がうみだす空間

何故、提灯の灯りはそのような効果をもつのでしょうか。

元々提灯が庶民に広まる以前は仏具として使用されたり祭礼に使用されたりしていたということが示すように、提灯には照明としての役割だけではなく元来火というものがもつ神聖さを引き出す道具としての役割があったようです。つまり、そもそも提灯は非日常の空間をつくりだすという重要なポテンシャルをもっていたといえます。

江戸時代中期以降提灯は庶民の間に広がっていきますが、その背景には江戸時代に夜間の外出が厳しく取り締まられ、外出時には提灯を携帯することや各家に提灯を常備することが義務付けられていたということもあると考えられます。これは、夜間の街に灯りがほとんどなく非常に暗かったためであり、そこは庶民にとっては日常生活と切り離された闇の異空間だったと考えられます。そうした中で携帯する提灯の灯りは、まさに「月夜に提灯」のとおり、月光にも劣る非常に暗い灯りで、非日常の闇の中に人が存在するための小さな灯りとして、元来の神聖さを伴って存在していたのではないでしょうか。

提灯のもつそうした効果は、夜の街が日常になってしまった現代の人にとっても健在であるように感じます。煌々とあたりを照らす電灯は夜の闇を消し去る力をもっていますが、提灯のもつ弱い灯りは辺りの闇を非日常の空間として再認識させ、そこと自分とを繋ぐ儚くも確かな標として人に働きかけます。

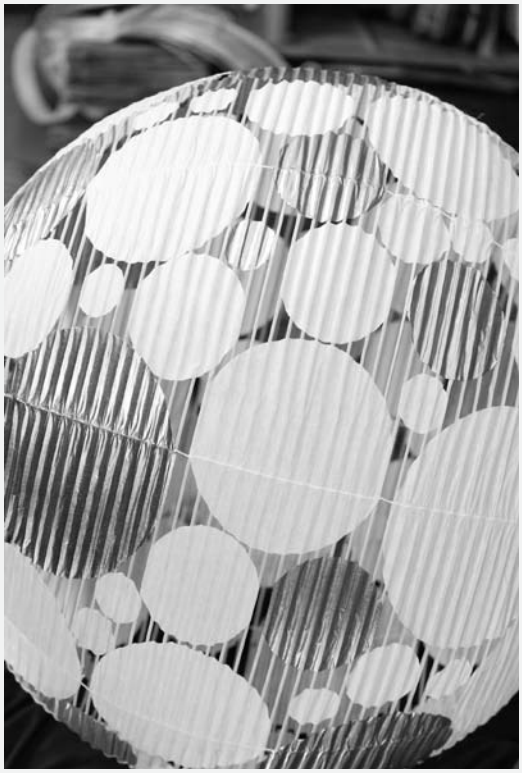
当たり前に過ごしてしまいがちな繰り返しやってくる夜の闇を不思議なモノに感じさせたり、闇をもっと妖艶に自由に特別に感じさせたりしてくれるのだと思います。現代の周辺を広く照らす電灯が非日常の闇を消し去り日常に変えるための道具だとしたら、炎の光によってゆらゆらと灯る提灯は非日常の闇の中に人が入るための道具であるともいえそうです。

これからの提灯

提灯は元来のお祭りや法事などでの使用に加えて、庶民に広まった当時は現代でいう懐中電灯や門灯のような日用品として、現代では街中のサインとして使用されることが多いようです。そのような提灯は昔から大きくは変わらないカタチやつくられ方でこの先も受け継がれていくと思いますし、そうあってほしいと思います。

それと同時に、提灯のもつ独特のあたたかみや、つくり出す幻想的な雰囲気などには、これからの提灯の新しい使われ方やカタチの可能性が多く含まれているように感じます。

電灯にはない提灯にある良さを活かした、非日常の闇を消すのではなく入り込んで楽しめるような装置として、新しい灯りのカタチが伝統を元にうまれていけば良いと思います。



さかき・じゅり　1989年生まれ　ラジオ局で番組の企画、編成に携わる傍ら、現代における伝統産業のあり方の再発見に取り組む

いけい・たけし　1978年生まれ　建築設計事務所、写真事務所を主宰する傍ら、大学等で非常勤講師を務める

(一社)京都建築士会

ところで、提灯はどこでだれがどのようにつくっているのでしょうか？
職人さんにお話を伺いました。

年間の依頼数、依頼内容や内容の変化などを教えてください。

お祭り用と看板が多いです。最近はいろんな方と一緒にオブジェのような提灯を製造したり、提灯製作の体験会を催したりもしています。

提灯のデザインやかたちなどは決まっていますか？また面白い、変わった提灯はありますか？

代々受け継がれてきた提灯の型がありますが、新たに特注でつくることもあります。小※菱屋忠兵衛では琳派400年の企画に参加してデザイナーとコラボして新しいかたちの提灯に挑戦しました。

ろうそくの灯りと電球の灯りでは何か違いはありますか？

火の灯りのほうが綺麗に感じます。祇園祭のときに路地などを歩いていると今でも何軒かろうそくの灯りで提灯をだされている家があります。やはり暗いですが雰囲気としては抜群にいいです。火の灯は電球と比べて浮いているようなふわーっとした温かい灯になります。街灯が灯っていない頃はとても綺麗だったと思います。

提灯の灯りの良さはどういうところだとお考えですか？

やはり和紙を通したあたたかみのある灯りが良いと思います。一口に和紙といっても様々で、直接和紙職人さんとコンタクトを取ったりしながら薄さや強さや畳みやすさなど、提灯に最適な和紙を探して仕入れるようにしています。

和紙以外の、例えば布や絹などの材料で挑戦しても面白いと思います。

小嶋商店さんの提灯のこだわりなどはありますか？

提灯の骨を、一本の竹を螺旋状に巻いてつくる「巻骨式」ではなく、一本ずつ輪にして麻糸で固定する「地張り式」にこだわって製造しています。提灯の需要が少ない時代だからこそ、他の提灯と区別するために材料や京地張りの製法を守りつくり続けていこうと思っています。と同時に、現状の技術に満足せずにこれからも技術や材料などを追求して良い提灯をつくり続けたいと思います。

提灯をどのように残していきたいとお考えですか？

小嶋商店では伝統的な製法で技術を高めていき、小菱屋忠兵衛では色々な分野の方と新しい提灯に挑戦して製造、小売りまでやっていきたいと思っています。元々提灯は外部で使用するものでしたが、これからは内部で使用する提灯なども開発していき、自分たちがつくった提灯がどーんとホテルやお店のシンボルとして、提灯の灯りそのものを見てもらえるようになれば良いと思います。

※小菱屋忠兵衛
伝統的な提灯作りを追求し続けていく「小嶋商店」と並行して、提灯のもつ良さをもっと自由に生かした提灯づくりに挑戦していくためのブランド。四代目までの屋号を採用。

小嶋商店

寛政元年創業。現在の親方は9代目にあたる小嶋護さん。
京都の伝統的な地張り提灯にこだわり、材料の選定から完成まで全て手作りで製作している。

〒605-0971
京都府京都市今熊野椥ノ森町11-24
TEL 075-561-3546
FAX 075-541-9448

(一社)京都観光協会

京のアソビ

5 墓

日常でよく見かけるけれど、
日常的ではない空間やモノ。
そんな空間やモノを取り上げて、
日常に潜む非日常について
考えてみたい。

文・写真：坂木壽里、池井 健　監修：魚谷繁礼

（一社）京都府建築士会

京都の街なかの身近な石碑・お墓

木屋町、河原町、寺町、東山、岡崎、御所周辺など、京都では繁華街や観光地の様々な場所で石碑やお墓を目にします。

たとえば、「坂本龍馬 中岡慎太郎 遭難之地（近江屋跡）」のように学校の授業で習うような歴史にまつわる石碑（①）が河原町通沿いの飲食店の前にさりげなくあったり、岡崎にある平安神宮の前には「平安神宮」と彫られた存在感のある大きな石碑（②）が建っていたり、他にも社寺仏閣までの道（③）や東西南北を知らせるための石標などが様々な場所にあったりします。

お墓もまた、京都の街を歩いていると様々な場所にひっそりと存在していることがわかります。賑やかな新京極商店街の裏には歴史の深そうな墓地がたくさん並んでいますし（④）、子供たちが元気よく遊ぶ住宅地の中（⑤）や、東山の華やかな観光地の中にも墓地があったりします。

街なかにおいてこれほど多くの石碑やお墓を目にするのは京都ならではのように思います。

①

②

③

④

新京極裏の墓地

⑤

石碑のもつチカラ・想いを刻む

さりげなく存在していることが多い石碑。史実が刻まれた石碑が建っている場所では、すでに当時の姿が跡形もなくなってしまっている場合も多いです。

そのような、たまたま見つけた石碑に彫られた過去の事実を見たときに、私は現代の景色からタイムスリップして当時の景色や事実や想いを想像させられます。そして授業などで習った事実が本当に起こった出来事なのだということをしっかりと感じさせられます。そうした石碑からは、ある時代をつくったり動かしたりした人物や歴史上の重要な事件が起こった場所など、当時の一般の人々の生活というよりは、どちらかというとすこし特別な過去の存在を感じます。

石碑を建てるのには様々な理由が考えられますが、当時の歴史的事実を今に知らせるというだけでなく、その瞬間にたちあい後継してきた人々の様々な想いを後世に残したいという気持ちもあるのかもしれません。そしてその想いが石の中に時を封じ込め、その石を現代と当時とをつなげる装置のようなものにしているのかもしれません。

(一社)京都府建築士会

止まった時間を閉じ込めているお墓

人が死ぬということは、永久に流れ続ける時間の中で、その人の時間だけが止まってしまうことであるようにも思います。

生きていた頃の時間の流れやその先の未来の時間の流れから外れて、一点の時の中に残される状態。どんな有名な人でも一般の人々でも、どんな時代に生まれても、死は必ず訪れます。

亡くなった人の家族は亡くなった人を弔い、止まった時間とともに故人の記憶を墓石に閉じ込めます。そうして建てられた墓石は当時のままのカタチで、流れ続ける時間の中で、そこだけ時を止めたまま、ずっと残り続けます。

そして色々な時代のお墓を見ると、石碑が示すような特別な事実ではなくて、現代の一般の人たちと変わらない人間がある時代を生きていたことを実感させられます。

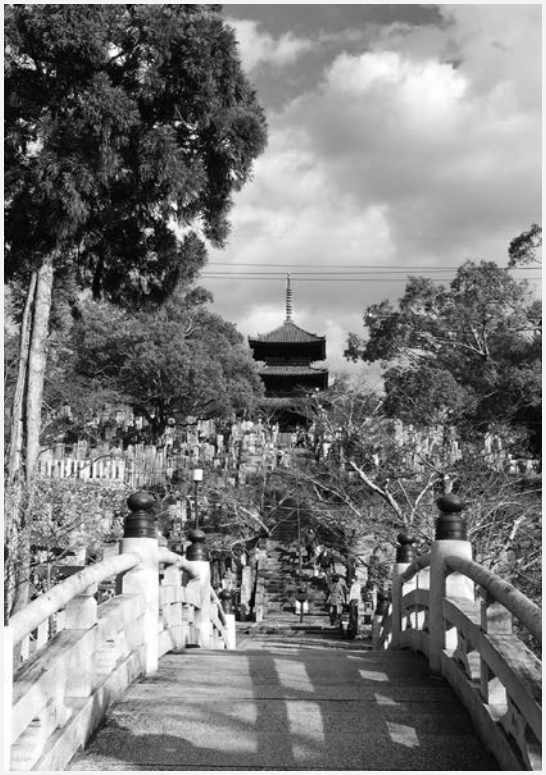
時が沈殿する場所

流れ続けている時間の中で、そうした石碑やお墓など、そこだけ時間が止まっているように感じる空間が京都の街には点在しています。これらの空間は、石碑やお墓によってそこだけ人工的に時が閉じ込められているのだともいえそうです。石碑やお墓が閉じ込めている時は、過去、現在、未来における他のどの時とも混ざり合うことがなく、それが示す事実があった時のままバラバラに存在し続けます。

たとえば石碑は、日常の街なかにそれぞれが単体として異なる時を点在させることで、街を歩いている人に偶発的に非日常との出会いをもたらします。またお墓に関しては、いくつもの時がそれぞれの墓石に閉じ込められて、そのような墓石が多数集合した墓地全体がまるで様々な時が地層のように沈殿した非日常空間となっているようにも感じます。

石碑や墓石がそのような想いや時を閉じ込めるためのものだと考えると、その材料として古くから自然に存在していて且つ風化しにくい石という材料が選択されていることにも納得がいきます。この事実や人物への想いを伝えたい。その想いを、壊れにくく風化しにくい石という素材に込めることによって、それは色あせることのない過去のひとつの時として後世に残っていくのではないかと思います。

このように、ある重要な時を閉じ込めた石碑や多くの有名無名な人の時が沈殿している墓地が、日々変化し続ける日常の街なかにおいて風化しない非日常空間として数多く存在することも、京都の街をより不思議で魅力的なものにしているひとつの要因であると思います。



さかき・じゅり　1989年生まれ　ラジオ局で番組の企画、編成に携わる傍ら、現代における伝統産業のあり方の再発見に取り組む

いけい・たけし　1978年生まれ　建築設計事務所、写真事務所を主宰する傍ら、大学等で非常勤講師を務める

(一社)京都建築士会

ところで、石碑や墓石はどこでだれがどのようにつくっているのでしょうか？
専門家にお話を伺いました。

石碑・墓石作りでは どのような道具を使用していますか？

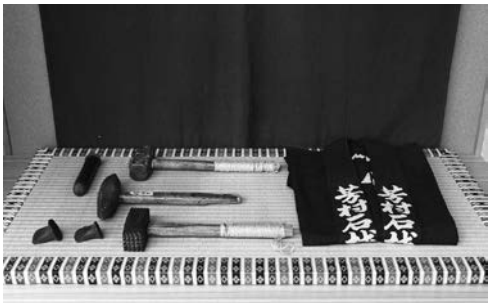
昔は職人が手で加工するノミやセットウ、ビシャンなどの道具が使われましたが、昭和四十年前後から、石材加工の機械化が始まり、今は機械が主流です。

作業工程で一番難しいところはどういうところですか？

建築石材、墓石共に直線的切断や、平面の研磨は機械化で問題ありませんが、曲線部の役物、たとえば墓石の蓮華や、五輪塔の傘等は技術とセンスが必要です。特に石仏彫刻は、日本人作家による製作を施主様にお薦めしています。日本人独特の感性の違いが表情や姿に出るため、据えてからの満足感が違うからです。

京都のお墓の特徴などがあれば教えてください。

お墓は地域で京都型、大阪型、神戸型と別れます。墓石の三段重ねは同じですが、香呂や供物台の形が違います。京墓石の特徴は香呂が三味線バチの形をしていて、供物台が小さく、その後ろの穴から納骨ができます。



石碑・墓石で使用する材料を教えてください。

手加工が主流だった昔は、彫刻しやすい砂岩系の和泉石が良く使われていましたが、今は御影石が基本です。中でも京墓石は青御影です。青御影石は中国製が安価でしたが、現在は毎年価格が上っていて、国産の大島石や庵治石に戻る傾向も見られます。また、石碑では小叩きをした白御影も良く使われます。

墓石に御影石が使用されるのはなぜですか？

自然の中での耐久性と表面磨きの美しさだと思います。昔から御影石の五輪塔や多宝塔などもありましたが、普及し始めたのは大正以降で、特に近年の石材加工機械の発展が大きく影響していると思います。

石碑や墓石の経年変化についてはどう捉えられていますか？

石も自然物のため、陽光や雨で石目が褪せたり、地中の水を吸い色が濃くなったりします。また同じ石でも品質差があり、銘石の大島石等は五等級もあるので、名前だけで安い石を選ぶと失敗します。外材には薬を塗り石目を濃くした石もあり、注意が必要です。

墓石・石碑つくりで一番大切にしていることはなんですか？

お祀りされる方の想いを大切にしています。たとえば、今の自分が在るのは両親のお陰だから一生懸命に供養したいという場合でも、高級墓石で意匠性に優れた墓地をつくられる方もおられますし、また、厳しい予算の中でできる限りの事をしたいという方もおられます。どちらも亡き人への想いや感謝の心は変わりません。墓石は、つくることだけが目的ではなく、つくった後に供養を続け、後世に想いを繋げることが何よりも大切かと思います。私達は、お客様の大切な亡き人への想いをカタチにする大事な仕事だという信念を持って、石の専門家として本当に良い品をお届けできたらと、心から願っております。

㈱芳村石材店

享保年間創業。北白川村で石工として業を興し、現在は建築石材、墓石、石碑などの設計、加工、施工を幅広く行う。初代茂右衛門から数えて七代目。

〒602-8043
京都市上京区東堀川通椹木町上ル五町目208
TEL 075-211-2711
FAX 075-211-2755

(一社)京都府建築士会

京のアソビ

6
最終回

自然

日常でよく見かけるけれど、
日常的ではない空間やモノ。
そんな空間やモノを取り上げて、
日常に潜む非日常について
考えてみたい。

文・写真：坂木壽里、池井 健　監修：魚谷繁礼

（一社）京都府建築士会

京都における自然

京都では、街を歩いていて日常的に自然を目にします。京都のイメージというと寺院や古い街並みが思い浮かびますが、それ以外にも例えば等間隔にカップルが座る鴨川や緑に溢れた御所、街中の桜や山々の紅葉など自然豊かなイメージも強く、美しい四季を感じるために京都を訪れる人も少なくないほど京都の街並みの中には多くの自然が溶け込んでいます。また、京都で暮らす人々にとっても、五山の送り火や鴨川の納涼床などの行事だけでなく、季節ごとの和菓子があったり町家の部屋から坪庭が眺められたりなど、四季や自然は生活に溶け込んだとても身近な存在です。そうした自然は町家やお寺の庭から、御所、鴨川、五山の山々など様々なスケールのものがあり、また自然と生活は隣りあわせであるようにも思います。

京都の街に溶け込んでいるこれらの自然には、同じ山々や川でも田園地方の自然のもつような雄大さや野性を不思議とあまり感じません。むしろそこからは人々の日常生活の中に人工的に非日常の風景をもたらしてきたような、京都の街特有の風情や幽玄さを感じます。

内の自然

京都の日常生活においてとても身近な鴨川や御所。これらの自然は街の中に存在しています。鴨川からは陽気の良い日中のほのぼのとした姿や、夜が深いときの妖しい雰囲気、または朝の霧がかった幽玄な姿など、見る時間や人によって様々な姿を感じます。御所も一歩足を踏み入れると、まるで時が止まっているような、街の中にあるのに平安時代へタイムスリップしたような感覚を覚えることがあります。寺院の枯山水庭や別荘などの池泉式庭園も日常の中の非日常を庭というかたちで現しており、それらを見たりその中に入ったりすると、現実の時間の流れに逆らうかのように、何にも捉われない時間軸の中で人生について考えたり、瞑想したり、現実世界から少し離れて心が落ち着いたりするように思います。町家の坪庭も、日常という現実の中についつい忘れがちな四季の自然を生活に取り入れることによって、生活を豊かにしているのではないでしょうか。

これらの日常に取り込まれている自然はどれも人によってつくり出されて管理された自然です。そのままの自然ではなくて、ある意味都合の良いようにアレンジされた人工的な自然だからこそ、日常生活の中に溶け込み、時代が変わっても日常の中の非日常として機能し続けているのかもしれません。

(一社)京都府建築士会

外の自然

都が京都に遷都される以前から、北白川や洛西地域などの平安京周辺部には既に畑作や稲作などの生産基盤があったそうです。その頃は、食料採取や生命維持のために自然と共生していました。そして平安京遷都の際に、四神相応の地として周辺の山や川や池などといった自然を根拠にこの場所が都として選定されました。風水以外にも、都の場所が農地に適さなかったため伐採されずにいた木を造営に使用することができたり、都を囲む地域から農作物や薪などが運ばれ、その帰りに大量の糞尿を堆肥として持ち帰ることができたり、都市機能で重要な点となる葬送の場所としての川があったりしたことなども、この場所が都として合理的だったのだといえそうです。

このように、京都の街は風水による自然との位置関係と、都市機能を満たすための合理的な自然との関わりによってつくられました。つまり、京都は精神的にも物理的にも周囲の自然に支えられた場所だったといえるのかもしれません。都は元々、天皇や公家が住む「内」と呼ばれる地域と一般の生活地である「里」と呼ばれる地域からなっており、その周辺に皇族が狩りに出て神々と交信する「野」と呼ばれる地域、さらにその外側に神々の領域である「山」がありました（図1）。当初、平安京では主に内と里が日常の場（都市）となり、野と山がその生活を支える生、死、神などといった非日常の場（自然）として計画されていましたが、早い段階から野に居住地が広がり、近年では火葬場やゴミ処理施設が山の中に建設されてきています。

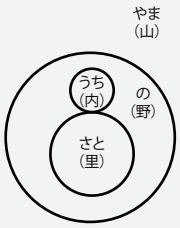


図1　うち-さと-の-やま

非日常に支えられる日常

京都の人々は、日常生活を送る都市の内側に寺院の枯山水庭や町家の坪庭、御所など、人工的な「内の自然」を非日常として取り込むことによって日常生活を豊かにしてきました。一方で、その京都の日常生活は都市域を囲む「外の自然」によって支えられてきたものでもあり、その自然は都市に住む人々にとっては非日常空間であったと考えられます。つまり京都は内の自然に日常の中の非日常を見出しつつ、非日常である外の自然に日常を支えられてきたともいえそうです。

日々生活を送っていると日常の空間を広い世界として認識し、その中でふとした瞬間に非日常の空間を見出しているように感じますが、実は元々より広く存在する世界は自然という非日常の空間であり、我々人間はその中に小さな日常空間をつくりだして生活しているのかもしれません。

そして京都は、そうしたことを構造的に体現している都市であり、日常生活においてふと遠くに目をやった瞬間にそうした非日常空間である外の自然を絶妙の距離感をもって感じられる都市であるようにも思います。

●参考文献／髙田研一（2015）「京都三山と里山の実像」「心の未来」第14号、京都大学こころの未来研究センター

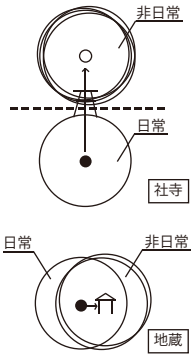
さかき・じゅり　1989年生まれ　ラジオ局で番組の企画、編成に携わる傍ら、現代における伝統産業のあり方の再発見に取り組む

いけい・たけし　1978年生まれ　建築設計事務所、写真事務所を主宰する傍ら、大学等で非常勤講師を務める

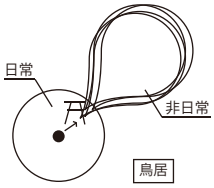
（一社）建築士会

これまで6回にわたって「ほこら・お地蔵さん」「鳥居」「梵鐘」「提灯」「石碑・墓」「自然」を採り上げてきた。いずれも京都の日常においてごく自然にみかけるものではあるが、それらはなにか我々を非日常の世界にいざなうような不思議さを併せ持っている。

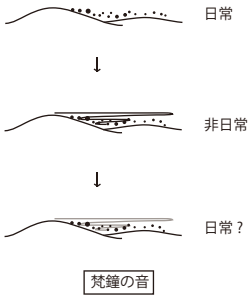
日常世界から非日常な世界に移動して仏や神に祈りを捧げるような寺社とは異なり、お地蔵さんを祀る祠堂は日常の世界にある。日常においてお地蔵さんにふれたとき、ふとここが非日常の世界であるかのように感じるかもしれない。



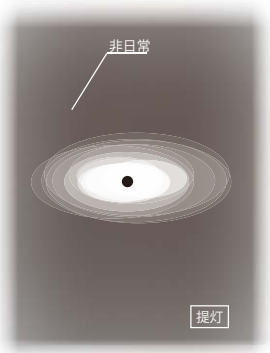
鳥居は日常世界と非日常の世界との間にあってその境界を指し示す。しかしまちのなかにある鳥居は日常世界のなかにあって、その鳥居の向こうでなにか別の次元の非日常な世界に繋がっているように感じる。



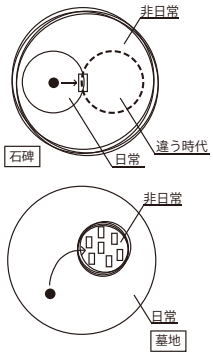
日常世界にあってふと梵鐘の音に晒されると、急に自分のいるこの場所が何か非日常な場所に感じる。梵鐘の音が余韻を残しつつ消えたのち、ぱたっと日常の世界に戻されるわけだが、そこはそれまでの梵鐘の音に晒される以前の日常世界とはどこか違う世界のように感じる。



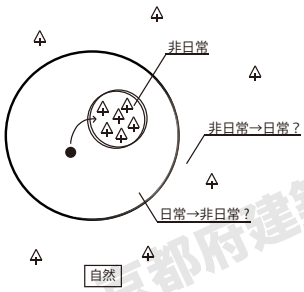
闇は非日常である。闇であるかぎり何も見えない。照明は闇を明るくして闇を消しさる。ぼわっとしつつゆらめくような提灯の灯りは闇をみせてくれる。提灯は道標がごとく私と非日常とを繋いでくれる。



石碑にふれることで今とはまた別の時代があったということを実感しつつ、自分のいるこの日常世界は、今とは異なる時代も含んだ時間を超越した非日常のなかにあるように感じる。日常の世界のなかに埋没したような墓地にふと迷いこんだとき、そこはさまざまな時間が堆積した時間を超越したような非日常な世界に感じる。



日常生活の舞台である都市のなかにつくられた坪庭のような人工的な内の自然に非日常を感じつつ、そのような都市の周りには山々という非日常的かつ非人工的な外の自然が広がっていることを思い出す。しかし実は非人工的な外の自然こそが日常で、そのなかにつくられた人工的な都市の方が非日常なのかもしれない。つまり日常や非日常といったことは表裏一体であることに気付く。



以上のように日常のなかに感じる非日常といっても、非日常世界を感じさせる構造はさまざまである。そして日常と非日常というのは絶対的にあるものではない。今、自分がある世界が日常であり、それとは別の世界を感じたときのその別の世界が非日常なのである。したがって、その非日常の世界に身を置いたとき、そこが日常にもなりうる。このようにして日常と非日常を区別する境界線を乗り越えたとき、そこに新たな世界が拓かれるのかもしれない。

（魚谷繁礼）

（一社）京都府建築士会